トロス司教座聖堂発掘報告（二〇一一）

―聖堂装飾遺物を中心に

田中咲子

キーワード
古代末期　ビザンチン美術　キリスト教　レリーフ　フレスコ　モザイク

二〇一一年度夏季に行った、トルコ南西部リュキア地方のトロス司教座聖堂発掘調査結果のうち、本稿では出土したレリーフ、フレスコといった聖堂装飾遺物について報告する。今回、舗床モザイクについても現状把握の目的から、一部の試掘を行った。舗床モザイクの本格的な調査は来年度以降になる見込みであるが、今回の試掘結果について本稿で言及しておきたい。尚、本発掘調査の総括的所見については、本号所収の浦野報告を参照されたい。

Ⅰ．レリーフ

1　出土概要と所見

今回の調査では、計九件のレリーフ断片が出土した。いずれも白色からやや乳白色がかった肌理の細かい石灰岩だが、58ａ－ｂには一部に結晶化が認められる。

今回出土したレリーフの多くがいわゆるラテン十字とアーチを基本意匠とする。18番以外は十字架をアーチが囲む形式をとり、58ａ－ｂ番では、そのアーチが少なくとも五つ連続する。また、63ａ－ｂ、69ａ－ｂ番においても、連続するアーチの一部をとどめていることから、さらなる

アーチが続いていたと思われる。[1]十字架やアーチの表現は、細部においてはそれぞれ異なるものの、形式的には先へ向かうにつれて腕が太くなり、先端の両側に小円を配すタイプの十字架である。このような十字架は、パレスティナなど地中海東部で作られた金属製の十字架にしばしば見られる形体であり、今回発見されたレリーフ上の十字架も、それを模したものといえるだろう。どの十字架にも下腕の先端に柄のような形体が付属しているが、これも金属製十字架を台座に挿入して固定するための部分に相当すると考えられる。[2]石板の厚さは、八cm前後が多い中、69a－b番のように一一cmと厚いものも含まれる。いずれにしても何らかの障壁として作られた石板であると想定される。

2　カタログ

18、18a－c（図1）

寸法　18：縦四七cm、横五六cm、厚さ七cm、レリーフ高一・九cm

材質　石灰岩

出土場所　第一室（北側廊と北翼廊の交差部）

大小四点の破片から成るパネル断片であり、[3]いわゆるラテン十字とアーチの一部、それを支える柱が表されている。十字架の左腕付け根からアーチを支える円柱の中ほどにか

図1　18、18a－c

けてと、十字架の左腕の中心線からアーチにかけて破損している。図像の右側と下側が枠で囲まれているため、パネルの右下角と考えられる。底辺の縁には組紐文様が刻まれているが、右側は縁の幅がそれよりも広いにも拘わらず、何の装飾もない。石板底面にも文様が刻まれているので、この石板はある程度の高さがある場所に据えられ、その下に空間があったかもしれない。

出土した他の作例ではアーチの内側に十字架が据えられているのに対し、本作では十字架はアーチとほぼ同じ高さをもち、隣り合うように並べられている。また、今回出土したものの中で唯一、十字架の内側に装飾が施され、最も手の込んだ意匠といえる。この十字架には台座（柱礎か）も伴う。[4] 台座はアーチを支える左側の柱のそれよりも丈が低いが、三段から構成されている点では共通しており、また、同様に内側に輪郭線を反復した形体が刻まれている。それゆえ、同一の台座として表されたものと考えられよう。

アーチ部分は二条の刻線によって三分割されており、左右両側へ張り出した柱頭がそれを受ける。この柱頭の右側には、十字架の左腕も乗せられている。柱はおそらく円柱を意図したものと考えられる。この上部には水平線が刻まれている。アーチと円柱で囲まれた空間に何かモチーフが表されていたかどうかは残存部からは確認できない。

58 a - b（図2）

寸法　a：縦五九・七cm、横三七・〇～六一・〇cm、厚さ七・〇cm
　　b：縦五八・七cm、横五〇・〇～九一・〇cm、厚さ八・〇cm

材質　石灰岩

出土場所　第一室（北翼廊）

現存部分は二片の断片に分断されており、左から数えて第二柱脚から斜め上方へかけて破断線が走る。石材は、大まかに述べれば今回出土した他のレリーフと同質の特徴を示すが、本作には灰色の大きな縞模様が認められ、また、一部、結晶化して大理石に近い風合いを示す部分もある。

残存部分には連続する十字架を伴う四つのアーチが認められる。レリーフの右端が失われたため、本来の全長は不明であるが、後述するように本来は少なくとも五つ以上の十字架が表わされていたと考えられるため、一五〇cm以上に達するものだったと考えられる。

各アーチは柱頭を頂く柱によって支えられ、さらにその柱を柱台が支える。また、アーチの内側には二枚の葉を伴う「生命の十字架」が内包され、スパンドレルには鳥が配されている。

各アーチは三条の線で表されているが、最も外側の線は、柱頭のすぐ上で隣り合うアーチの同じ線と合流し、柱頭との接点では、線は六本ではなく五本になっている。また、

図2　レリーフ58 a - b

63番のアーチのようにスパンドレルの図像に合わせて弧が反復されることはない。アーチを受ける柱頭は上辺の長い台形であり、その内側にも台形が二度ずつ反復され、余白を埋めている。

柱台は、基本的に三段であることが意図されているようであるが、左から数えて三番目の柱台は輪郭が曖昧であり、二段であるようにみえる。また、各段の高さは統一的ではなく、最下段が最も高く、中段、上段はわずかの高さしかない。その意味では、最下段が柱台の角柱部分を、中段、上段が柱礎部分を意図しているのかもしれない。柱台の内側に刻まれた凹線は、柱台の階段状の形体をそのまま反復したもののあれば、簡略化したものもある。左から四番目の柱台内側には他より多い四条の線が刻まれているが、これは柱台自体が他よも大きいためと考えられる。おそらく内側の余白が大きくなりすぎるのを避けるためであり、統一的な規格は意図されていないと思われる。残存する断片には、部分的に形を留めている右端のものも含めて計五つの柱台が表されているが、レリーフ最左端の柱台は、それ以外のものと異なる形状を示している。すなわち、柱台内側に凹線が刻まれておらず、柱台自体の高さも他と比べて低い。これに対し、残存部の右端にみえる柱台は、それ以外の柱台とほぼ同じ高さであり、且つ内側に刻線もあるた

め、本来の石板の右端ではないということになる。つまりこの石板には、少なくとも五つのアーチと十字架が表されていたことがわかる。

アーチ内側の十字架は、各腕先端に二つの小円を付したタイプであり、その点では今回発見された他の十字架と共通している。しかし渦巻きをなしておらず、腕の先端から左右両側に滴が形成されるかのように単に迫り出しているだけである。腕の太さも、中心部と先端とを比べてもほとんど変化がみられない。また、輪郭の内側に走る刻線の彫りも他と比べて浅い。そのため、他では形体を取り囲む輪郭線の稜線が明瞭であるのに対し、本レリーフの十字架では、上部が平坦であり、稜線をなしていない。

十字架の根元から伸びる二枚の葉は、十字架先端部から直接ではなく、先端部と地面をつなぐ直線の中ほどから、左右に生え出ている。また、各葉歯の先端は鋭く、葉頂は上方ではなく内側へ向かっている。各葉の葉歯の数は四〜五と統一性がない。

スパンドレルには三羽の鳥が表されており、それぞれポーズが大きく異なる。左側の鳥は、左向きのプロフィールで表されている。太く長い嘴をもち、両脚をほぼ揃えて左側に向け、アーチにとまるポーズをとる。中央の鳥は、画面左方向へ走っているが、頭部は右を向いている。比較的長く太い尾をもつ一方、翼は小さくたたまれている。右側の鳥は背中の毛繕いをしている。長い尾羽が特徴的である。[5]

石板の上端には、枠取りが施されているが、左側と下部にはそうした枠はない。

本作は、他のレリーフと比べ、石材、十字架や葉の形状など、異なる点が多々ある。それゆえ、工房や制作時期が異なるなど、他のレリーフとは別の環境で制作された可能性が高い。

図3　レリーフ 58 c

58ｃ（図3）
寸法　縦四〇・〇cm、横六一・〇cm、厚さ八・五cm
材質　石灰岩
出土場所　第一室（北翼廊）
「生命の十字架」の下腕と二枚の葉、それを囲む二本の柱とそれぞれの礎石を留める断片である。石板右端の断面とそこに表された柱、礎石の形状から、石板の右端下部に相当する断片であると考えられる。
十字架の腕の先端には二つの小円が付されており、69番ほど明白とは言い難いものの、渦巻き型となっている。生え出る葉先も同様に上方へ伸び、その葉頂は外側へ反り返る。しかし葉の根元付近が太いのに対して、葉身の幅は狭いなど、葉全体のプロポーションは69番ほど整っていない。柱の礎石も構造的には69番と同様に、高さの等しい2段からなっているが、各段が69番よりも高く、礎石全体の大きさも大きい。69番と同じ意匠が目指されており、同じ場所を装飾する石板として制作されたと考えられるが、制作者は異なると思われる。

63ａ－ｂ（図4）
寸法　ａ：縦二六・五cm、横三八・〇～五七・〇cm、厚さ七・五～八・五cm、レリーフ高一・二cm
ｂ：縦一九・〇cm、横四〇・〇cm、厚さ七・五～七・八cm、レリーフ高一・二cm
材質　石灰岩
出土場所　ａ：第一室（北翼廊）
枠どられた石板の角をとどめた断片である。アーチがみられることから、58番や69番と同様に連続アーチを表す石板の左上部をなしていた断片であると考えられる。石板の下方と右側は大きく欠損し、現存部分もアーチの左上方が斜めに割れている。
枠取りの内側には、鳥か聖獣か、あるいは動物以外

図4　レリーフ63－ｂ

であるのか現段階では主題不明のモチーフ、アーチ、その内部に組紐文様が配されている。アーチは、組紐文様と同様、基本的に三条の線から成るが、右側の弧線は五条となっている。そのさらに右へ続くアーチも、同じように五条の線で表されていると考えられる。線の本数がここで増加しているのは、スパンドレルに置かれた菱形の文様に呼応させているためであろう。ただし後述する65番や69番では線形の葉を表したものとも考えられる。

69a－b（図5）

寸法　a：縦一七・五cm、横二〇・〇～二五・〇cm、厚さ一一cm

b：縦四三・五cm、横二八・五cm、厚さ一〇cm

材質　石灰岩

出土場所　a：第二室（北翼廊）、b：第一室（北翼廊）

石板の右辺がほぼ直線状に切断されているのに対し、左側は十字架の途中で斜めに破損し、左腕が欠損している。また、十字架の下腕と葉の中央を横切るように、石板が分断されている。石板右上の角も破損を受けている。

本作は、アーチの内側に「生命の十字架」を配したレリーフの断片である。十字架の根元からは二枚の葉が生え出ており、急なカーブを描いて上方へ伸びている。葉はブナ科の葉のような葉縁をなし、葉頂を含めて五つの葉歯に裂けている。葉頂はわずかに外側へ反る。葉の主脈と葉縁を示す刻線に比べて側脈の彫りは細く浅い。二枚の葉の付け根の間からも、葉柄のようなものが生じている。18番では同じ部分がより大きく太く表され、金属製十字架の「脚」を思わせる作りであったが、本作では葉に準ずるモチーフとして変形されているといえよう。

十字架を囲むアーチは、中央の太い線の内側に凸状の細い線が沿うように走る。一見、外側にも同様の線が走るようにみえるが、これはむしろスパンドレルのモチーフの一部であろう。アーチを支える柱や、十字架の輪郭も、凸状の明瞭な稜線をもつ線によって囲まれている。

十字架の各腕の先端に対になって付された小円は、十字架の輪郭をなす凸状の線の延長上に生じている。各小円の輪郭線が、腕をなす輪郭線によって分断されているゆえ、制作の際には、腕の輪郭をなす凸線が腕の先端に行きついたところで外側へカーブさせ、小さな円弧を描いたと思われる。その意味では、この十字架の小円は、渦巻き型と定義できよう。

スパンドレルには、滴型を逆さにしたような形体がみえ、アーチに沿う凸線が、この形体とアーチとの隙間を埋めている。

アーチを支える柱の礎石は二段になっており、大きな歪みはない。但し、柱とアーチの接点においては、柱がアーチよりもやや右側へずれている。この柱から右へ伸びるアーチの一部が見られることから、石板がさらに右へ続いていたとも考えられる一方、柱とアーチのずれや右辺の断面が整っているゆえ、ここが石板の端であった可能性もある。

図5　レリーフ 69 a－b

60（図6）

材質　石灰岩

根元から葉の生えた十字架を刻んだパネルの断片である。今回出土した十字架の葉には、葉が垂直方向に伸び、葉先が僅かに外側へ反りかえるタイプと、葉脈が弧を描いて葉先が内側へ伸びるタイプの二種類が認められるが、本断片の場合は、十字架の腕の幅に対する、先端の小円のプロポーションや、根元から生え出る葉がなすカーブの角度が69番に近い特徴を示すことから、前者のタイプであると考えられる。69番の断片と同じ石板、もしくは同じ作者である可能性もあるが、十字架を支える「脚」が69番よりも長いことから、断定はできない。

図6　レリーフ 60

以下は寸法、出土場所、（番号）不明の断片

史苑（第七二巻第二号）

65（図7）
材質　石灰岩
出土場所　第一室（北翼廊）
　アーチの中に十字架を配したレリーフの断片である。十字架の腕は先端に向かうにつれて太くなり、その先端の両側には渦巻き型に分類されうる小円が付されている。十字架やアーチのプロポーションや細部の造形が69番とよく似ているが、スパンドレル部分のモチーフの表現がやや異なる。すなわち本作では、細長い葉のような形体がアーチに沿っておらず、両者の間に空間がある。こうした違いはあるにせよ、葉と思しき形体の先端の形状や位置が似ているゆえ、69番と同一のモチーフがここに表されていると考えてよいだろう。60番とともに、本作も69番と同じ石板、あるいは少なくとも同じ手、同じ工房の作である可能性が高い。

図7　レリーフ65

図8　レリーフ断片

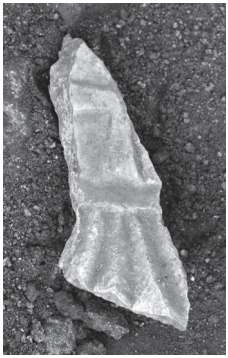
図9　レリーフ断片

番号不明（図8）
材質　石灰岩
　縄目文様を施した縦三〇cm前後、横一五cm前後の石材断片である。側面、裏面とも表面は荒く、正面も含めて全体的に摩耗している。

番号不明（図9）
材質　石灰岩
　十字架のモチーフの一部を留めた長さ二〇cm前後の小片である。翼廊一号墓から出土した。

番号不明（図10）
材質　石灰岩
　透かし彫りを施した障壁の一部と思われる断片である。

図10　透かし彫り断片

Ⅱ．フレスコ

1　保存状態

　北側廊及び北翼廊の内壁については、もともと地上に出ていた部分は、漆喰の残留度が比較的高く、壁面の半分以上はいまだに漆喰で覆われている。しかしながら表面は荒く風化し、且つ黒カビがはびこっており、目視の限りでは彩色の痕跡は皆無である。他方、地中に埋まっていた部分は漆喰がほとんど剥落し、石積みとモルタルの壁体がむき出しになった状態で出土したが、この部分からは、ごく限られた範囲ではあるが、北測廊内壁で三箇所（F1、2、3）、北翼廊内壁で三箇所（F4a-b、5、6）において、フレスコ画の痕跡が認められた。また、北翼廊内の柱や、教会堂建立後いつの時期かに追加されたと考えられる仕切り壁（PW）や祭壇の一種と推定される構造物においても、各所にフレスコの存在が確認できた。西壁の漆喰の保存状態はよくないが、身廊と南北側廊を隔てる腰高障壁との接点の脇に、部分的にフレスコ画の痕跡が残っている（F7、8、9）。北壁と接合する角にも、僅かにフレスコが認められる。また、フレスコが付着したレンガ片（F14、15）も発見された。

2　所見

　全体的にフレスコの保存状態はひじょうに悪く、外的損傷を比較的うけにくい壁と壁が接する角など、残るのは壁面全体のうちのごく一部である。そのため、描かれていた主題を推測することは不可能である。
　西壁にはフレスコが二層になった部分（F9）があるが、それ以外の壁面にはそうした例は認められなかった。ただ

しF7では、白い顔料の下から、赤い顔料で斜線が引かれた痕跡がうかがえた。

今回、幅七cm前後の赤い帯状の描写が複数個所に確認された。壁面（F1、F6）や角柱（F10）の端にそうした帯が認められる場合が多く、ビザンチン壁画全般にみられる枠取りであると考えられる。他方、地色は、北翼廊支柱（F10）の西側面中央部分のように青や淡緑色が用いられていると思われる箇所がある一方で、F1では乳白色が、また、F6では黄色みの強いクリーム色が使われている。北翼廊支柱（F10）も、各面の縁を赤い帯が囲み、その内側に黄色みの強いクリーム色が用いられ、さらにその内側に青または淡緑色の面が続いている。黄色みの強いクリーム色と乳白色が、赤い帯と隣り合う地色として使用される傾向がうかがえる。どちらも一般的に「クリーム色」と定義されうる色であるが、なぜ、本稿で「乳白色」と述べる白に近いクリーム色と、「黄色みの強い」と形容したクリーム色の二種類があるかは疑問として残る。

フレスコの痕跡は、壁体や暫定的に小祭壇と名づけた構造物の部材の中からも発見された（F2、13）。また、西壁F9のように、フレスコの上にさらにもう一層、漆喰を塗って新たにフレスコを描いた箇所もある。北翼廊支柱には、そうした漆喰の二層構造は見られなかったが、漆喰表面が全体にわたって槌で凹凸がつけられているのが確認されている。補修、あるいは堂内の図像プログラムの変更によるなど、壁画が描き替えられた可能性がある。漆喰の材料や顔料の比較などが今後の課題になるだろう。

3　カタログ（各壁面ごとに出土したフレスコの現状詳細を記す。番号は図11に対応。）

北側廊内壁

F1（図12）

位置　西側角（内壁の北側から西側にかけて連続）

寸法　縦一〇六cm以上、横三〇cm（北側）、四〇cm（西側）

地色は乳白色であり、建物の角に沿うように赤色の帯が上下に走る。また、北側には現存上部から六六cmの位置に同様の赤い帯が水平に描かれている。垂直の赤帯の幅は北側も西側も五・五cm、水平線は七・五cmである。いずれもやや褐色がかった赤である。さらにこの水平線の下方に、これらの帯よりもやや明るめの赤色で、すばやい筆致で殴り描きをしたかのような筆跡が認められるが、具体的な形象は不明である。他方、残存部上部には淡青緑、赤、黄褐色の色彩がわずかに残る。

西側の地色も北側と同様の乳白色であるが、その下層に

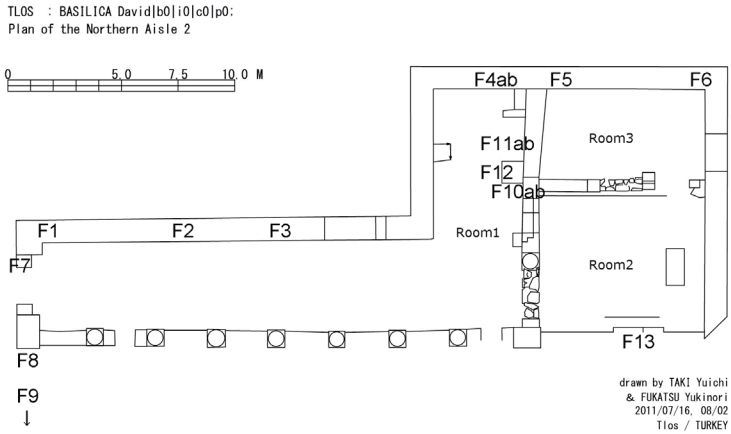

図 11　フレスコ配置図

全体にわたって左上から右下に向かって等間隔に赤で引かれた斜線の存在が確認された。

図 12　フレスコＦ１

Ｆ２（図13）
位置　西角より六一〇～六二五cm
寸法　横一五cm

クリーム色、青、白の賦彩のあるレンガもしくは石材と思われる部材が壁体に埋め込まれ、部分的にその上に漆喰が付着している。おそらく本来別の壁面に描かれていた壁画の一部であり、壁面補修などの際に、部材として再利用されたものと考えられる。赤色は上記Ｆ１と近い色を示すが、こちらの方がやや明度が高い。

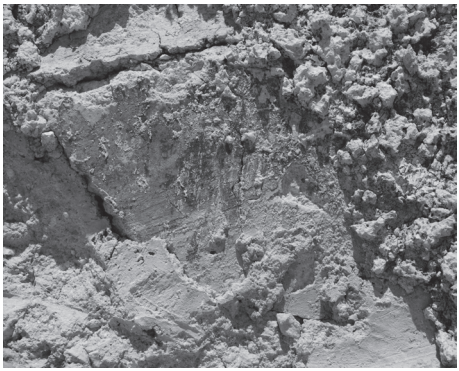

図13　フレスコＦ２

Ｆ３（図14）
位置　西角より九六〇～九八三cm
寸法　縦二〇cm、横二三cm

上から順に水平に黄褐色、白、赤、乳白色の賦彩が認められる。白線は幅〇・七cm、赤い帯は幅七cm。漆喰の厚みは約〇・二cmである。表面に付着物が認められないため、Ｆ２とは異なり、この彩色された面が壁の表面であったと考えられる。

図14　フレスコＦ３

北翼廊北壁

F4a-b（図15）

位置　a：PW3との接合点より西へ一〇五cm

　　b：同、七七cm

寸法　a：縦一一・五m、b：縦一七cm、横一四cm

　切藁と思われる繊維質が混入した漆喰面に、青い彩色の痕跡がかすかに認められる。混入した繊維質の長さは約一～一・五cmである。F1やF3と比べ、表面は粗い。

図15　フレスコF4（部分、拡大図）

F5（図16）

位置　北翼廊仕切り壁（PW）3との接合点東側角

寸法　縦二三cm、横四七cm

　現存部分には、右から垂直方向に引かれた緑、白、黄色の帯がみられ、白地を挟んで左側にも黄色い帯がみられる。この左の帯を寸断するように、ほぼ黒といえる色の賦彩が認められる。この色は、部分により緑もしくは赤味がかっていることから、黒を表現するためにこの二色を混合したものと推測される。具体的な形象は不明であるが、何らかの具象モチーフが描かれていたと考えられる。右側の黄色い帯の下部は途中で途切れ、その下方に白地に赤で描かれた何らかのモチーフが看取される。

　目視の限り、このフレスコは北翼廊北壁とPW3との接合面にも続いている。したがってPW3の設置以前に描かれたものといえよう。

　本箇所より東側三七cmに僅かに赤い賦彩痕が認められる。

図16　フレスコＦ５

Ｆ６（図17）

位置　北翼廊東角（北側から東側にかけて連続）

寸法　縦五三cm、横九cm（北側）、一〇cm（東側）

北壁と東壁の角、両面にまたがるように、上下に走る赤い帯が描かれている。北側の帯の幅は三・五cm、東側は二cmである。この帯は、残存部上部で途切れ、そのさらに上方には横に並んだ赤い小さな格子文が看取できる。地色は黄色みの強いクリーム色であり、Ｆ１にみられる、より白い地色とは異なっている。

図17　フレスコＦ６

西壁内壁

Ｆ７（図18）

位置　北壁と北側入り口の側柱との接合点

左から順に赤、白、黄色みの強いクリーム色の垂直線が描かれている。中央の白線の幅は〇・八cmである。漆喰残存部右側は、剥落防止のために補修された。

図18　フレスコＦ７

Ｆ８ａ－ｂ（図19、20）

位置　北側腰高障壁との接合点南側に隣接

わずか一cm四方以下の点状ではあるが、赤や黄色みの強いクリーム色の色彩の痕跡が複数認められる（Ｆ８ａ）。また、これらの彩色された漆喰の下層、すなわち鏝でえぐられたモルタルの表面に、ところどころ淡い赤色が認められる。これらの色彩が顔料による賦彩であるか、それとも別のものに由来するかは目視だけでは判断できない。これと近接する部分から、白と青の彩色をとどめた縦横約五cmの漆喰片が発見された（Ｆ８ｂ）。この漆喰片の上に別の漆喰層があるため、本来別の場所に描かれた壁画の一部が、崩落後に何らかの理由（例えばモルタル材としての再利用など）で入り込んだものと考えられる。

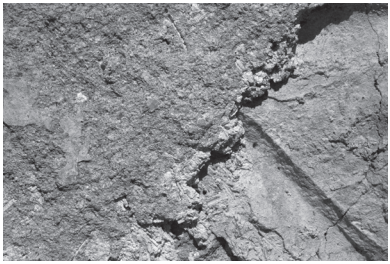

図19　フレスコＦ18ａ（部分）

図20　フレスコＦ18ｂ

Ｆ９（図21）

位置　南側腰高障壁との接合面上部から北側にかけて隣接身廊と南側廊を隔てる腰高障壁と西壁との接合面周囲に賦彩の跡が認められる。本箇所の漆喰は二層になっており、もともとのフレスコ画の上に、さらに二～三㎜の厚さで漆喰を塗って新たなフレスコ画が描かれている。上層の漆喰が吸着するように下層の表面を鎚で傷つけたような跡が認められる。その一方、上層にも一箇所、同様の鎚跡がみられる。両層とも描かれているのは垂直に伸びる不特定の幅の帯であるが、使用されている色彩や、それぞれの幅は上下層で異なる。下層では赤、青、青緑が用いられ、それぞれの色彩の境界には五～七㎜ほどの幅の白線が引かれている。さらに上層で覆い隠された部分を経て、黄色、赤、青緑と続く。上層では赤、黄色、白の三色が確認できる。下層の赤が明度が低いのに対し、上層の赤はピンクに近い淡い赤となっている。上層の漆喰の一部（腰高障壁との接合面北側）にグラッフィートが見られる。一見、楓の葉を思わせる描写であるが、具体的なモチーフや記号ではないと思われる。

漆喰の剥落が進んでおり、応急的に周囲がセメントで固着された。

図21　フレスコＦ９

北翼廊支柱

F10a（図22）

位置　西面

石柱下部の漆喰は剥落しているが、それ以外はほぼ全面にわたって漆喰が残る。しかしながら、その表面には全体にわたって鎚で叩いたような損傷の跡がみられる。後から別の漆喰を塗って化粧をし直すために付けられたものと考えられる。

石柱左端、いわゆる小祭壇Aとの接合面の上部（図22）は、他と比べて賦彩の保存状況が良好である。左から赤（幅五cm）、濃紺（幅〇・七cm）、黄色（幅一二cm）、濃紺（幅〇・七cm）の順で、垂直方向に帯が並ぶ。さらにその右側には淡緑色の地色が広がっている。この淡緑色を地色とする部分は保存状態がよくないが、ところどころ濃紺の賦彩の跡も認められる。また、石柱右端部分にも、黄色や赤の賦彩痕が看取できる。左端と同様の色面構成になっていたと推測される。

漆喰の厚みは〇・二～〇・三cmである。

F10b（図23）

位置　南面

支柱の南側面は仕切り壁（PW）1と接合しており、露出しているのは上部三分の一ほどである。露出部分の最上部と右側約半分の漆喰が剥落しており、残存するのは左側に限られる。賦彩表面は劣化し、PW1との接合点上部にかすかに、おそらく白色と思われる地の上に、赤い彩色が認められるにとどまる。

図22　フレスコF10a（部分。祭壇Aとの接点付近）

図23　フレスコF10b

北翼廊仕切り壁（PW）3
F11a－b（図24、25）
位置　祭壇Aの左上方
寸法　a：横三七cm

わずかに青い彩色をとどめるが、一見しただけでは見逃してしまうほど退色している。表面には、北翼廊北壁のF4a－bとほぼ同様に、幅一～二mm、長さ一cmほどの穴が不均衡に認められる。

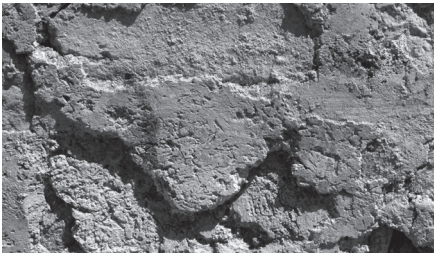

図24　フレスコF 11 a

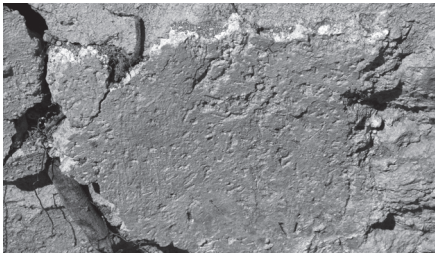

図25　フレスコF 11 b

小祭壇A
F12a－b（図26、27）
位置　a：西面右上部、b：南面中央上部
寸法　b：縦二cm、横二cm

西面の右側、ブロックの上にレンガを積み重ねた部分にのみ、漆喰と賦彩の跡が残る。本祭壇上部のやや迫り出した部分には赤、その下の壁面には水平に走ると思われる幅7cmほどの赤い帯や、何かの具象モチーフを描いたとも考えられる赤、黄褐色、くすんだ青の賦彩も認められる。幅〇・二～〇・三cmほどの赤と黄褐色の水平線が交互に三～四本ずつ配されていることまでは確認できるが、残存面積がひじょうに小さいため、モチーフは特定できない。

南面には、現時点での最上部、中央付近に縦横二cmほど、赤く彩色された漆喰片が認められる。この漆喰片の付着面よりも、下のレンガの方が迫り出していることから、上部に突起部があったことがわかる。この面には他に彩色痕は認められないが、中ほどには無彩色の漆喰表面に少なくとも三本の水平線が刻まれている。小祭壇Cでも南面に水平線と垂直線が刻まれているが、小祭壇Aの刻線はそれと比べて本数が少なく簡素である。

この小祭壇の周囲からは、彩色のある小さな漆喰片が多数発見された。いずれも二cm四方以下と小さく、描かれて

いた図像を知り得ないが、用いられている色彩はF12aやF15などにもみられる赤や黄褐色、鮮やかな青や緑であり、同一画面を構成していた可能性がある。

図26　フレスコF 12 a

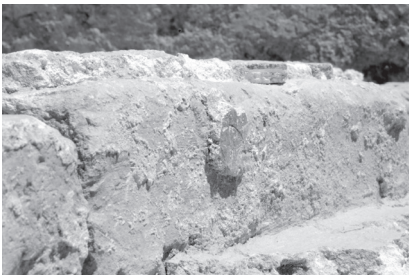

図27　フレスコF 12 b

祭壇状構造物

F13（図28）

位置　西側積石構造部上面

本構造物は東側三分の一ほどがレンガ積み構造であり、西側三分の二ほどが積石構造である。この積石部分上段の石材の上面に、賦彩痕が認められる。手前から順に、幅七cmの赤い帯、幅一cmに満たない白線が引かれ、それ以外の大部分には青い彩色がかすかに看取できる。本石材の上面の高さは両脇の石材やレンガよりも低いため、さらにその上にレンガなどが積み重ねられていたと考えられる。それゆえ、この石材は本来、別の場所で壁面を構成していたものであり、例えば崩壊など何らかの理由でその場所から離れ、本構造物の設置時に転用材として用いられたと推測できる。つまり賦彩痕は本構造物設置以前に描かれた壁画の一部であると考えられる。本箇所の漆喰にもF4、11のような切藁の痕跡が認められる。

図28　フレスコF13

た。一方の面には青い地を背景に、今回出土した「生命の十字架」のレリーフにみられる葉を思わせる形体が白で描かれているほか、その先端付近に赤い丸い物体とそこから広がる緑色の形体が見て取れる。その左側、レンガ片の角には赤い帯が描かれており、隣り合うフレスコ面へと続いている。赤い帯の両脇に沿って白い細い線が引かれている。隣り合う面には特に具象モチーフは認められず、青い地のみである。この面の地色の青は、先の面よりも明るい。隣り合う二面にフレスコ画が描かれていること、枠取りと思われる赤い帯が角に描かれていることから、本来、柱や小祭壇などの角に当たる場所に置かれていた可能性が高い。しかし、その構造物から崩落して直接地中に埋まったのか、あるいはその構造物の崩壊後に建材として一旦再利用された後に埋まったのかは不明である。

F14（図29）

寸法　縦五・〇～五・五cm、横一四・〇～一六・〇cm、奥行き一三・五cm

一側面にフレスコ画が描かれたレンガ片として発見された。青い地を背景に衣服の一部が描かれていると思われる。襞の陰影が赤、朱鷺色、白で描き分けられている。地色は深みのある青であり、F15の具象モチーフの背景と近い色を示している。

F15（図30、31）

寸法　縦六・五cm、横一六・五cm、奥行き一三・〇～一三・六cm

二側面にフレスコ画が描かれたレンガ片として発見され

図 29　フレスコＦ 14

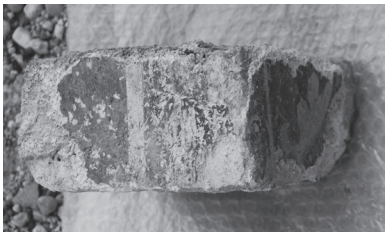

図 31　フレスコＦ 15
（右側に見える面が図 30 の面）

図 30　フレスコＦ 15

Ⅲ．舗床モザイク

今回の調査では、保存の観点から、モザイク舗床面の一〇～二〇㎝のレヴェルまで発掘し、舗床面まで掘り下げなかった。しかし、現状を把握し、今後の保存方法を検討する必要性から、一部試掘を行った。

試掘したのは構造物の北側に隣接する約七〇×四〇㎝四方である（図32）。いわゆるギリシャ十字を取り囲むと思われる円を含む文様が現れた。テッセラは一辺が一・二～一・五㎝であり、大半が白い石灰岩であると思われるが、一部には黄褐色のものや、赤褐色の陶片テッセラも使われている。しかし陶片テッセラは厚みが他の半分ほどしかなく、剥離が目立った。現状の確認後、保護のために再び埋め戻したが、今後、発掘を進めていく上で、舗床モザイクの保存は大きな課題である。

図 32　舗床モザイク

注

（1）但し、69a－bについては、石板右辺が垂直に断ち落とされており、レリーフの右端であったとも考えられる。その一方、石板の再利用の際に、切断した可能性も否定できない。

（2）地中海東部の金属製十字架については早稲田大学教授、益田朋幸氏よりご教示頂いた。

（3）最も大きい断片が18、アーチ上部を表す断片が18a、柱頭を含む断片が18b、円柱の一部を含む断片が18cである。

（4）この形状からは、刳型を伴う柱礎を意図したものであるのか、それとも角柱部分を備えたペデスタルであるかは確認できない。本稿では、各段の高さがほぼ等しいものを柱礎と、58番のように下段が高くなっているものを柱台と呼ぶこととしたい。

（5）益田朋幸氏によれば、それぞれの鳥のポーズが、写本挿絵に描かれるイニシャルの鳥を手本にしている可能性がある。

（南山大学兼任講師）

Ausgrabungsbericht: Bischofskirche zu Tlos, Lykien 2011 — Reliefs, Fresken und Mosaike

TANAKA, Emiko

Das japanische Ausgrabungsteam führte von Anfang Juli bis Anfang August 2011 unter der Leitung von Prof. Urano (Rikkyo-Universität, Tokio) die Ausgrabung der Bischofskirche durch, die inmitten der antiken Ruine von Tlos steht. Das war die zweite Saison für das Team, und bisher wurden das Atrium (2010) und das nördliche Seiten- sowie Querschiff (2011) freigelegt. Der hier vorliegende Aufsatz berichtet über die in dieser Saison gefundenen Reliefplatten, Wandmalereien und Mosaike.

Insgesamt 9 Reliefplatten wurden entdeckt, die vermutlich aus feinem weißen Kalkstein angefertigt sind. Die meisten tragen das sogenannte Lebenskreuz, aus dessen Fuß zwei Laubblätter wachsen. Das Kreuz ist von einem Bogen umgeben. Die Plattenfragmente Nr. 58a und 58b sind die größten unter den Relieffunden dieses Jahres. Die Länge der beiden Fragmente beträgt 128cm. Auf der erhaltenen Platte sind vier von Bögen umgebene Lebenskreuze dargestellt. Aufgrund der am rechten Rand erhaltenen Säulenbasis können aber mindestens fünf Kreuz-Bögen auf der originalen Platte rekonstruiert werden. In den Bogenzwickeln befinden sich drei Vögel. Das Ende jedes Kreuzarms verzieren zwei Perlen. Die Platten Nr. 69a und 69b zeigen eine ähnliche Ikonographie. Es sind jedoch keine Vögel vorhanden und die Kreuzarme werden zum Ende hin breiter, während diese bei Nr. 58 gleich breit bleiben. Die Perlen des Kreuzarms bei Nr. 69 bilden kleine Volute, wohingegen diese bei Nr. 58 direkt von der Kante ab anschwellen. Die Blätter wachsen aufrecht nach oben und die Spitze biegt sich leicht nach außen. Bei der Platte Nr. 58 dagegen verkrümmt sich das Blatt nach innen. Daraus lässt sich schließen, dass es unter den diesmal gefundenen Platten zumindest zwei verschiedene Stile gibt. Die restlichen Kreuze können zum Stil der Platte Nr. 69 kategorisiert werden. (Zugehörigkeit der Nr. 18 ist noch unklar.)

Die Wandmalerei ist nur teilweise erhalten. Festgestellt wurden z.B. die roten Bänder, welche bei der byzantinischen Wandmalerei im Allgemeinen vorkommen und zur Gliederung der Bildfelder dienen. Weder Figuren noch konkrete Motive lassen sich erkennen. Unter einem Stück der Freskenschicht wurde noch eine gemalte Schicht des Stucks gefunden. Das Fresko auf dem Pfeiler im Querschiff war durch Hammerschlag beschädigt. Das lässt vermuten, dass man die Oberfläche mit neuem Stuck überziehen wollte.

Für das Bodenmosaik wurde eine Probegrabung unternommen. Diese wurde aber zum Schutz vor der Verwitterung wieder aufgeschüttet. Der ausgegrabene Teil des Bodenmosaiks stellte Kreuz- und Geflechtsmuster dar. Das Mosaik bestand hauptsächlich aus weißen Steintesserae, aber zum Teil wurden auch gelbe sowie Terrakottentesserae verwendet. Besonders letzteres Material war nicht mehr stabil. Viele Tesserae waren nicht mehr vorhanden. Die Erhaltungsmaßnahmen sind für die weitere Ausgrabungsarbeit dringend notwendig.